

《研究ノート》

「テクノロジー批判理論」についての覚え書き

— 自然および人間労働の脱文脈化 (decontextualization)、労働の非技能化 (deskilling) を中心に —

中 田 重 厚

フィーンバーグはテクノロジーの何を問題にしているか

(フィーンバーグ⁽¹⁾ 1～5) このノートでは、現代テクノロジーをめぐる様々な議論をフィーンバーグの「技術」(法政大学出版局) (Critical Theory of Technology, 1991) を中心に整理していきたい。まず、彼は、この本の冒頭で、今日私たちの社会における労働、教育、環境の悪化の根源がテクノロジーにあるとする陳腐な思想に対して、「根源はむしろ、テクノロジーの発達を支配している反民主主義的な価値観のうちに存するのである」と言っている。

社会が良い社会であるための条件は、第一に、個人の自由が確保され、またその拡大が保証されるものであることである。そして、そのことと合わせて、幅広い公的活動への有効な参加が保証されていることであるとフィーンバーグは言っている。個人の公的な営みは、そもそも人間的であるとは如何なることかといったことに関わる取捨選択を含むようになる。そして今日そのような選択は、技術に関する決定を介して行なわれる傾向が著しくなっていると言う。すなわち、私たちの持つ“道具 (tool)”の形態が如何なるものか、またテクノロジーの設計を誰がデザインするかは人間存在に関わる重要な意志決定の問題である。がしかし、今日、この意志決定からは世間の大多数の人間が排除されてしまっている。

もとより、こうした人間存在の問題から出発し、産業化された文明社会の下での人間疎外を克服するための真に民主主義的な改革を考えてきたのが社会主義 (socialism) であった筈である。19世紀の産業化過程の中で、資本の軛の下で、労働者たちは既存の体制に立ち向かいその内部で変革を行うか、その外側に労働者自らによる自主管理の組織をつくって対抗するか、いずれかの方法によってその運命的状況に立向っていった。そして、そうした運動はその後、世界各地で、様々な形態をとりながら続けられて今日に至っている。

しかるに、労働者の権力国家として成立したソヴェト社会主義国家は、当初の理想から大きく外れて官僚支配型の国家体制を生みだしてしまった。当初の理想は、労働者の民主的な評議会を意味する“ソヴェト”を元にした民主主義的な社会主義国家を形成する筈であったがそうはならず、国家官僚や技術官僚が支配する体制が生まれた。ここに、産業化のシステムの問題とテクノロジーの民主的運営の問題を考える重要課題が生ずる。

以上の歴史的過程については、「技術」の第3章(「移行」における相克)の中で述べられる。

ポスト・モダン(モダンの思考様式の解体、すなわち出来事の継起が発展の意味をもつものと見る歴史観の解体) / 歴史の終焉(フクヤマ) / カール・マンハイムの予言(「イデオロギー

とユートピア」)

テクノロジーの「道具説」と「自立的存在説」

(フィーンバーク6~12) フィーンバークは、これまですでに確立されているテクノロジー論を「道具説」と「自立的存在説」の二つに分類し、自らの説を「テクノロジー批判理論」と名づけ、既存の二つの説に対置する。

「道具説」(もしくは「中立説」)は、世間一般に広まっている考え方であり、各国の政府や政策科学に支配的な考え方である。すなわち、この説は、様々なテクノロジー(自然科学的技術と社会的管理技術)は、その利用者の目的に奉仕することを待ち受けている「道具」もしくは「手段」であるとの常識的な考えに立脚する。テクノロジーは、それ自体のうちに価値判断の対象をもたない、いわば「中立的」なものだと考えられる。「中立性」とは、ひとつは、それが用立てられる目的の多様性とは無縁の存在である。すなわち、道具的媒体と、これが奉仕することになるもろもろの自立性ある価値観との間の関係は、ただたんに偶然的なものであるにすぎない。つぎには、テクノロジーは、政治に対して無縁、無干渉であるようにみえる点である。更に、テクノロジーは、いかなる国、異なった文明の下でも、同じ「効率性」(efficiency)という価値基準を適用することができる。この意味でテクノロジーは中立的であると考えるのである。

(フィーンバーク11) テクノロジー「道具説」では、今日降盛を極めているファストフードは、不必要な社会的煩雑事を省いて栄養豊富な食事を供給してくれるという点から高い評価が与えられるだろう。家庭内で行なわれる食事での家族の一体感や共食、儀式的な食事の文化的価値は、カロリーを摂取するという生物学的な必要性にとってみれば第二義的なものと考えられて

いる。今日問われるべきは、どのようなテクノロジー、どのような進歩かという問題であるが、ここではすべてが「効率性」の基準に合わせられている。

(フィーンバーク125)「道具説」のもう一つの問題点は、行為の主体者は、それが用いられる手段の如何とは関わりなしに定義することが出来るとするが、こうした考えは、主体者と手段とが互いに弁証法的により合わさっていることを無視している。例えば、大工という職業では、職人がその道具である鋸、鉋などとの関わりを通じて育てられていくことからみても、「道具説」は誤りであることが分かる。

あとで考察する技術と技能についての議論に関わって、ここでの「道具説」に関する議論は極めて重要となる。

(フィーンバーク9~12) テクノロジーの「自立的存在説」で最もよく知られているものは、ジャック・エルルとマルティン・ハイデッガーの著述にみられるものである。この説は、テクノロジーは社会のすべてを管理の対象物として作り替えようとする、ひとつの新しいタイプの社会システムであると考えられる。

(フィーンバーク10、234) マックス・ウェーバーの合理化の「鉄の檻」(iron cage)、ただし、彼はこの予言をとりわけてテクノロジーと結びつけているわけではない。

ハイデッガーの「技術論」に関するノート(省略)

テクノロジー的合理性

(フィーンバーク132~136) ウェーバーによる合理性の社会学——ウェーバーの関心は専ら「形式主義的」合理性に寄せられている。これは、価値に関わりのない中立的な形の「合理化」である。

テクノロジー的「合理性」が社会的支配その

ものを正当化している。／技術が、あらゆる物的生産の普遍的な形式となるに及んで、技術は一つの文化の全体の輪郭をとり決める。一次元的 (one-dimensional) な性質の世界、ここではもはや批判的な意識が存在する余地はない。

マルクーゼの合理性の理論は、合理性の中には技術的ならびに社会的な諸機能の凝縮の姿があるとの旨を議論するについて、一つの普遍的な枠組を提供している。

取り入れ (introjection)

(マルクーゼ⁽²⁾ 28～29) 「取り入れ」という場合には、自己が「外部のもの」を「内部のもの」に置きかえる様々の相対的に自発的なプロセスが想定されている。このように取り入れには、内的な次元、すなわち世論や社会的態度から独立した個人的意識や個人的無意識が存在するという含意がある。ここには「内的自由」という観念が現実性を持っている。だが今日こうした私の空間はテクノロジーな現実によって侵入され、削り取られている。そして、取り入れの多様なプロセスはほとんど機械的な反応に硬化してしまっているように思われる。適応→模倣／現状の破壊。

直接的で自動的な同一化過程は、精神の内的次元《理性の批判的な力》を削り取っていく。また、テクノロジーな進歩の成果は、イデオロギーを正当化するだけでなく、イデオロギー的告発をも不可能なものにする(ダニエル・ベル「イデオロギーの終焉」)。かくして、「虚偽意識」が真の意識となる。

「テクノロジーの社会的コード」もしくは「資本主義のテクニカル・コード」／テクノグラムとソシオグラムとの関係 (省略)

ノーブルのコンピューターNC機械についての考察 (省略)

フーコーの権力=知 (power/knowledge)

(フィーンバーク136) マルクーゼの合理性の理論は、合理性の中に技術ならびに社会的諸機能の凝縮された姿があるとする議論に対して一つの普遍的な枠組を提示している。フーコーもまた、「権力」(power) は合理性の様々な形式を通して組織され、行使され、正当化されると主張している。

(フィーンバーク137) フーコーは以上のことを、現代の社会科学、管理科学、医学の根源をめぐる研究を行ない、歴史的に追究している。そして、その根源を17世紀以来自然発生的に現われてきた社会的管理の様々な新しい慣行のうちに見出している。こうした慣行のことを彼は「顕微鏡技術」と呼んでいる。「顕微鏡技術」とは、なんらの全体的な決断もないままに、ただたんに精確さのみをもって繰り広げられる管理の意味であり、具体的には、点検すること、訓練すること、個人の進歩の態様を測ること(学校での成績評価、工場労働者の仕事の業績評価など)、個人を検査のために隔離すること、関係書類やファイルの方式を整備することなどが含まれている。そして、これらの慣行は、はじめは、軍隊、女子修道院、病院、学校、監獄、工場といった多様な設定の下で発達し、このような慣行の蔓延の中から、やがて規律権力 (disciplinarily power) が成立してくるという。

フーコーは、知もテクノロジーも中立的(道具説で言う)なもので、つまり、価値とは関わりがないとする説を否定する。新しい「知」の形式と新しい管理の形式とその両者の繋がりが成立した例は、たとえば心理学や犯罪学にある。それらは病院や監獄など特定の施設の中から誕生している。この繋がりに関してフーコーがあげる明瞭な事例は「ベンサム式円形刑務所」である。ここでの一望監視方式(パノプティスム)

はその象徴である。

(フーコー⁽³⁾203~4) ベンサム式円形刑務所—これは、円形の建物の中心部から、監視人が囚人たちに知られずに各独房を一挙に監視できるようにになっている。

ベンサムの考えついた<一望監視施設(パノプティコン)>という建築装置は、権力の行使者とは独立した或る権力関係を創出し維持する機械仕掛けになるように設計されている。ベンサムが立てた原理は、その権力は可視的でしかも確証されえないものでなければならないというものである。すなわち、囚人たちは、自分を見張る人物が塔の中に居ることは承知しているものの(可視的である)、自分が凝視されているかどうかは確認できないのである。

パノプティコンは、以上のことを可能にする巧妙な仕掛けである。中央部の監視室は外から見えないようによるい戸がかけられ、更に室内を直角に区切る仕切り壁が設けられているため外からは人影を認めることも逆光を捕捉することもできない。この装置の下では見る=見られるという視角の相互性が閉ざされている。これはまた、権力を自動的なものにし、没個性化する装置でもある。今日のコンピューター装置による監視カメラはパノプティコンの仕組みが完成度に達したものとさえよう。機械装置の下では、機械が監視人にとって代われ、没個性化が完成する。

(フーコー178) 規律、訓練の制度 [=施設] は、人間の行為を調べる顕微鏡として機能する取締装置を広め、その制度によって実現された精密で分析的な区分は、人々のまわりに、観察・記録・訓育の仕掛けを形づくった。フーコーは、こうした仕掛けを、学校や軍隊、大工場、病院、監獄を歴史的に考察し、その共通項をみている。

形式主義的合理性から弁証法的合理性へ

(フィーンバーク329) マルクスは、市場合理性が社会の階級的構造を再生産し、資本家の支配体制を強化していくメカニズムを分析している。そして彼は、資本主義的合理主義がもつ限界を超え、一段と高い弁証法的合理性の中にもみずからを立地させる。したがってまた彼は社会主義のことを、市場に付着する反合理的、反効率的な異常生成物としてではなく、むしろ新しい形の合理的秩序として記述する。

(フィーンバーク330) ルカーチの初期における「物象化」(reification)をめぐる理論—彼は、市場の構造および官僚制度の構造がいずれも本質的な形式主義的合理性の構造と内的関連をもっていると考える。さらにまた、ルカーチは、社会の細分化、分析的思考、テクノロジー、私的所有権者の管理下での生産諸単位の自動化などに由来する、思考の様式と行為の様式との一体化の現象に光を当てる。

細分性から全体性への前進という概念—これはすでにヘーゲルによって予見されていたものである。分析的「悟性」がもっている、対象物を抽象的に隔てられた各部分へ分かち傾向は、弁証法的「理性」によって克服される。

(フィーンバーク331) フィーンバークは、彼のテクノロジー論の拠って立つところを、このヘーゲルを経てルカーチに至る、弁証法的理性による分析的理性の否定、超克に求めている。形式主義的合理性(分析的悟性)は、ことさらに資本主義的であろうとする文化にとってその基本原理に相当している。そして、弁証法的理性は、社会主義社会の要請に合うように自らを適応させていくのである。

現実社会のレヴェルでは、社会主義が資本主義の遺産を発展のための両義性をもつ基盤として用いる(例えば、コンピューターのもつ横断的なコミュニケーションの媒体という側面)のと合わせて、思想のレヴェルでは、弁証法はま

た、形式主義的合理性をその限界と意義とを見極めながら、より大きな自らの枠組の中へ包摂することになるのである。

(フィーンバーグ334) このルカーチの理論のマルクーゼによる更なる展開——「論理数学的」ないし「形式主義的」な普遍性 (formal universal) と「実質的」な普遍性 (substantive universal) との間の弁別。

実質的な普遍性は、発達しつつある全体 (人間界および自然界のシステム全体) について、その内的な首尾一貫性と潜在可能性を表面に表わすといった抽象化のプロセスを通して打ち立てられるものである。これと反対に形式主義的思考は、全体からの抽象化を、そこでの潜在可能性の発揮よりも、むしろそこでの形式の形成を目指して行なうのである。形式主義的な普遍性 [という見方] は、対象物について時間と空間の両面における脱文脈化 (decontextualize) を行なう。そしてまた、その内容を空洞化しつつ、その発展のダイナミズムをも捨象するものであるとフィーンバーグは言っている。

技術的实践における物象化の4つの契機

(フィーンバーグ365~375) 伝統的な社会においては、技術はつねにより大きな非技術的な人間関係の枠組みの中に組み込まれていた。すなわち、技術 (的实践) はより包括的な非技術的な「行為のシステム」によって文脈化を施されていた。いずれの時代に於ても、つぎにあげる「物象化」の契機は、社会生活の中の技術という限られた領域の内部で技術とその対象物との関係の特徴づけてきた (例えば育児の中で最新の医薬品を用いるなど) が、資本主義のもとではじめて「物象化の諸契機」が社会の全体を包み込む形となる。

(1) 脱文脈化 (decontextualization) の契機——すなわち、技術的実践の対象物 (自然および人間労働) の文脈からの分離。

まず自然についてであるが、自然が技術的実践の対象物として再構築されるときに、それらが本来的に見出されるシステムや文脈の中から人工的な分離を受ける。また、人間の労働については、資本主義の下での労働力の分解と再構築の過程は人間労働の脱文脈化を成し遂げる (テラー主義の下での、熟練労働の解体を議論する頭脳労働と肉体労働の分離はその最もたるものである)。前資本主義社会においては、人間の労働は、それが再生産される社会的条件である家族や共同社会の文脈の中に置かれ、活用されていた。また、労働の創造的な力は、個別的職業を通して伝承され、発達してきた。すなわち、ここでは、労働者は常に技術のオーガナイザーであり続けていたのであり、技術の下で動かされる対象ではなかった。しかし資本主義のもとでは、人間の手、背中、肘などの身体の局部が有する技術的な特性 = 「行為の図式」として自然の対象と同じような条件で提供することが求められる。労働者は共同社会や家族のような制度、すなわち文脈から切離されて、たんなる手段に零落する。

(2) 還元 (reductionism) の契機——第一次的性質の第二次的性質からの分離。“第一次的”とは、技術を扱う主体者 (これらの要素は権力の基盤にあたる) の立場からみてこのように言うのである。

還元事例として、ヴァンダナ・シバが科学的林業における還元主義について言っている。科学的林業は、生命の多様性の価値を商業的に有益なほんの数種類の生物種の価値へと還元する。例えばユーカリの木を栽培、植林はパルプに適した外来樹種のモノカルチャーである (『生物多様性の危機』三一書房)。

(3) 「自治化」 (autonomization) の契機——主体者の客体からの分離。主体者は、技術的反

作用を最小限にすることが可能であり、資本家はこのシステムの中では彼らの「運営的な自治」、すなわち自由裁量権を再生産することが可能となる。

(4)「位置の確定」(positioning)の契機——主体者が自らを戦略的に優位な位置に置く。

テクノロジーの弁証法

——脱文脈化から再文脈へ——

(フィーンバーク375~380)技術的実践の客体について、その手段化の第一次の水準では却けられていた諸局面に働きかけること。第二次の手段化は、㊦「具体化」もしくは「反抽象化」㊧天職の意識 ㊨美的潤色 ㊩平等の立場の4つの契機を内容とする。

テクノロジーの具体化とは、ギルバート・シモンソンによると、個々の機械的な構造のゆるやかな連結から始まり、その客体が技術的に洗練されるのに合わせて、新しい一つの構造における複数の機能の統合が生まれてくる。さらにそうした新しいいくつもの構造の間の相互作用の中から、ひとつの強力な共働の関係が生まれてくる。このような形の進展のことをシモンソンは「具体化」(concretization)と名付ける。

テクノロジーの「具体化」(省略)

「自然」への道(省略)

技術知と技能知

(渡植⁽¹⁾5~36)渡植は、近代科学技術の根底にあるものを技術知として捉え、これに対して、技能としての技術は前近代的社会や非西欧的文化圏において発達したもので、ここでの知を技能知として捉えている。科学技術が一種の知識体系であるのに対して、技能はあくまでも肉体活動であるという。

技術知と技能知との対照は、意識を中心とする近代西欧的知能と潜在意識的知能との対照に置きかえてみることができるのではないかと渡植は考える。ただし、フロイトの場合は、潜在意識層は抑圧された衝動的なものにかかわり、むしろ反知性的なものと捉えているのに対して、ユングの場合は、意識的知能を補う役割を果たしている。ただし、今日の近代的技術を支えているものは、単に知識体系から出てくるのではなく、古くから仕事の現場で受け継がれてきた技能伝承が元になっているのであろう(河合隼雄「ユング心理学入門」/「家族関係を考える」)。

ただし、多くの仕事の現場では、資本効率第一主義の下で、工程のマニュアル化が進み、技能の生きる職種が減少していく傾向にある(ハリ・ブレイヴァマン「労働と独占資本」(付)技能に関する最終ノート)。

仕事知と生活知

(渡植135~170)渡植は、「技術知と技能知」という論文から一年ほどして「仕事集団と生活集団」という一文を書いた。それから10数年経ってから、彼はこの二つの発想は実は互いに関連し合うものであることに気付く。すなわち、「技術知」は「仕事集団」があってはじめて出現を見るものであり、一方、「技能知」も「生活集団」の中で自ずから育てられたものと考えられるのである。しかし、今日では、その「技術知」が「仕事集団」から出て「生活集団」全般に力を延ばし、「生活集団」を圧迫してきている。この渡植の見方は、すぐれて社会学的な分析視角であると考えられる。

今日の事柄で考えると、家族崩壊の原因の一つが「仕事集団」の優先にあることは明らかである。「仕事集団」としての企業が「生活集団」としての家族から単身赴任という形で父親を離反させ、また、家計補充的労働力として母親を

奪っている。

仕事知、すなわち技術知は生活知すなわち技能知（生活する知恵）を萎縮させる。日常生活の中での技能知の領域は益々後退を余儀なくされ、その結果、人びとの感覚技能や身体技能まで退行させられる。近年の子どもたちにみられる生活能力や感覚機能の減退については「感性があぶない」（毎日新聞社刊）の中で、保育所での子どもたちの事例が書かれている。

狩猟生活に生きるインディアンの少年たちに課される動物の足跡・読解の勉強—これは生活の必要性から生み出された技能知の典型例である。「シートン動物記」（集英社刊）の中にこの記述がある。レヴィ・ストロース「野生の思考」で示されているインディオの知恵。また、わが国の伝統社会の日常の中で習得されてきた技能知の事例については、大田堯著「教育とは何か」（岩波新書）／「子育て・社会・文化」（岩波書店）に詳しい。

渡植の「自然農法」に対する誤解

（渡植29）渡植は、福岡正信の「自然農法」に言及し、その農法は名人芸に属するものだと絶賛している。がしかし、他方では、その農法は、「かねて学んだ科学技術を一擲の下に斥けている」と言っているが、これは、氏の「自然農法」に対する全くの誤解であり、この誤解は氏の無理解によるものと思われる。

渡植の言うのとは違って、「自然農法」とは、科学技術の知識を捨て去るどころか、それを最大限に生かす農法なのである。福岡自身が述べているように、自然農法とは、自然まかせの農法ではなく、植物種の性質を最大限生かす形で人間がその最適環境をつくり出すために近代科学（化学、生物学、土壌学、気象学などの知識）を採用した農法である。したがって、ここでは、自然自体が農業の主体であり、人間は自然のな

りわいを助力し、その恵みにあずかるものとして位置づけられている。渡植は、技術知と技能知とを統合する方向が望ましいとし、その実践例として山本市朗（「北京三十五年」岩波新書）をあげている。しかし、その点ではむしろ、渡植が言うのとは異なり、福岡正信の「自然農法」は技術知と技能知が見事に統合した典型例であるといえよう。

渡植理論の眼目——「使用価値」、「効用」

（渡植171～）この本の解説部分で、内山節は“非文化としての資本制社会批判の理論”と題して渡植理論の要点を解説している。それによると、つぎの通りである。

渡植は、マルクスの資本制経済社会分析を更に発展させ、そこから資本制経済社会の否定を必然化させるキー概念として「使用価値」を考える。だが、渡植によって捉えられた「使用価値」はマルクスのそれとは異なる。マルクスは、使用価値を歴史貫通的に存在するものとして捉えていたのに対して、渡植は、資本制商品経済の下での使用価値がそれ以前の使用価値とは異なる特殊性に着目する。

すなわち、資本制商品経済以前の社会では、使用価値はつくり手の熟達された技能とその使い手との文化的な交通の中に成立するものだが、資本制商品経済社会の下では、価値の生産を目的とする商品の生産と、その商品から効用を得ようとする消費者との間の交通となっており、ここでは本来の使用価値は成立っていないと見る。

渡植は、マルクスが商品価値と使用価値の矛盾として捉えたものを、価値と効用の矛盾として捉える。効用とは、資本制商品経済の下での特殊化された使用価値であり、使用価値であって使用価値でないものに他ならない。この限界効用（カール・メンガー）こそ“疎外された使

用価値”もしくは“人工的な使用価値”として、資本制社会における消費者の商品に対する意志を支配していくものであり、同時に労働者を「(本来の) 使用価値をつくる労働」から疎外していく基本的な因子であるとする。

- (2)マルクーゼ「一次元的人間」河出書房新社
- (3)ミシェル・フーコー「監獄の誕生」新潮社
- (4)渡植彦太郎「技術が労働をこわす——技能の復権——」農文協

注(1)フィーンバーク「技術」法政大学出版局

(なかた しげあつ、本学科教授)